よみがえった16世紀イタリアの貴重書
『スムマ』（第2版）

イタリアの数学者パチョーリが著した簿記学の原点と言われる書物。正式な書名は『スムマ・デ・アリスメテイカ』で、日本語に訳すと『算術、幾何比および比例総覧』となる。初版は1494年にヴェネツィアで出版され、本書はその第2版で1523年にトスカーナで出版されたが、日本国内でも明治大学をはじめとした数館の大学図書館にしか所蔵されていない世界的な貴重書である。

本書は2001年に本学が購入したが、2015年9月10日の大雨による水害で甚大な損傷を受けた。修復士の岡本幸治氏による8年間に及ぶ懸命の修復作業を経て、水没したとはとても思えない美しい姿でよみがえった次第である。

水没からよみがえったお宝本

そのお宝が本学の図書館にお目見えしたのは2002年のこと。いまから20年以上前の話である。本の名前は『スムマ・デ・アリスメティカ』。ちょうど500年前の1523年に、イタリアのトスカーナで出版された。書名を日本語に訳すと『算術、幾何比および比例総覧』で、算術百科事典として当時の数学知識を集大成した本書は、複式簿記を最初に理論化した出版物として知られ、会計学で重要な位置を占める。その当時の学術用語はもっぱらラテン語だったが、この本は庶民の言葉であるイタリア語で著されているのも特徴だ。著者は「会計学の父」といわれるルカ・パチョーリ(1445年～1517年)。『最後の晩餐』を制作中のレオナルド・ダ・ヴィンチとの交流もあったらしい。

本学所蔵の『スムマ』(略称)は第2版ではあるが、再版ですら日本で所蔵している大学は片手で数えるほどで、所蔵の手はずを整えた本学の元教授で図書館長だった渡辺金愛(かなめ・故人)先生は、「このような世界的貴重書を取得できたことは、白鷗大学の大変な栄誉であり、誇りであります」と記している(「図書館だより」第19号)。因みに本書の初版は、かのグーテンベルクの活版印刷を使った最初期の書籍で、古書市場ではインキュナブラと呼ばれる「超」稀覯本であり、バブルのころは1冊に数億円の値が付いたらしい。

その『スムマ』が予期せぬ悲劇に見舞われたのは、いまだ記憶に新しい2015年の大行寺地区における水害でのこと。2メートル近い床上浸水被害のなか、図書館に駆け付けた職員が目の当たりにしたのは、見渡す限り汚泥の海にプカプカと浮かんでいる『スムマ』だった。

とにかく500年も生きていれば、書物とて人間同様さまざまな出来事に遭遇するだろうが、水に浸かるという「事件」だけは、ものが紙だけに死にも匹敵する苦難だったに違いない。その過酷な運命を乗り越え、7年間に及ぶ修復作業を経て、このたび『スムマ』が図書館に戻ってきた。その詳細は新年度から予定している修復経過の展示をご覧いただきたい。

ここでは『スムマ』の復活を報告するにとどめるが、なによりもこの貴重な書物をよみがえらせてくれた「命の恩人」であるアトリエ・ド・クレの岡本幸治氏に感謝したい。岡本氏は日本でも有数の書物修復(ルリュール)の専門家であり、氏との出会いがなければ『スムマ』が本学に帰ることはなかったといっても過言ではない。まさに幸運な出会いだった。丸8年に及んだ修復作業は、氏の本に対する愛情の賜物に違いない。また、修復にあたってご協力を賜った明治大学図書館にも感謝したい。同じ版の『スムマ』を所蔵するお立場から貴重なご協力を賜った。これもまた尊敬すべき書物愛といえよう。

報告の結びに、この修復作業によって判明した『スムマ』の知られざる「歴史」について付け加えておきたい。ひとことで500年といっても、トスカーナから小山の地へ来るまでには数えきれないほどの人の手を転々と渡り歩いたはずである。それを悲喜こもごもの歴史と言い換えるのは容易い。本学の『スムマ』も今回が初めての修復ではない。その証拠に過去の修復の痕跡もいくつか見つかった。それらは今回と同様に、受難からの復活を意味する歴史かもしれない。と同時に、1冊の書物が受けてきたかけがえのない愛情の証しともいえるだろう。見事によみがえった『スムマ』が、これから未来に語り始めるのは、自らが受けた愛情の尊さであるに違いない。学生諸君には、修復展示からその愛情の一端を感じてもらいたい。

＊『スムマ』は図書館本館の2階に展示してあります。また修復作業のパネル展示会は4月から9月まで、本館2階にて開催する予定です。